HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	吉岡徹, 菅原優, 脇谷祐子編著『北海道農業のトップランナーたち(先導者たち)』(筑摩書房, 2021年)
Author(s)	高畑, 裕樹
Citation	フロンティア農業経済研究, 24(2), 68-69
Issue Date	2022-09-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90265
Type	other
File Information	24(2)_11_Takahata.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書　評

吉岡　徹・菅原　優・脇谷祐子 編著『北海道農業のトップランナーたち（先導者たち）』

（筑波書房、2021年）

富士大学
高畑　裕樹

北海道農業が、日本農業における最も重要な食料基地の一つとして我が国の食と農業を支えてきたことは広く周知されている。しかし、北海道農業が歩んできた道のりは決して平坦なものではなかった。かつては、厳しい自然的条件や農産物市場に対する経済的な立地条件からくる限界地としての性格を背景とした構造的問題に苦慮していた。現在では、それに加え、後継者不足や労働力不足、さらには国際的な貿易の自由化・グローバル化の進展による海外との激しい価格競争等の問題に直面している。

この様に、刻々と変化する多くの問題を抱える北海道農業には、それらに対し様々な知恵と工夫で対応し続けるトップランナーたち（先導者たち）が存在する。本書は、『21世紀北海道農業の先駆け』（2001年刊行　筑波書房）の第２弾としてトップランナーたちの取り組みを詳細に記したものである。

さて、本書を見ると、大きく３部で構成されていることがわかる。第１部の「北海道農業の今」では、序章として構造変化が進む北海道農業の現状を、統計資料を用いながら整理することで今日的課題を抽出してる。第２部の「北海道農業のトップランナーたちの挑戦」では、第１部での分析から農業地帯を稲作地帯、畑作地帯、酪農地帯、複合地帯に区分し、さらには、現在注目を集めている農村女性にも焦点を当て、実際の事例からトップランナーたちの取り組みを紹介している。最後に第３部の「北海道農業の今後の展望」では、本書の総括と今後の北海道農業における展望を①北海道農業経営の経営的展開、②トップランナーを支える、協同する農協・農民組織の役割、③有機農業や６次産業化農業の展開、④北海道農業を支える新たな流通や生産を担う女性たちの活躍の展開の４つの視点から述べている。

本書の核となるのは、実際に事例を挙げることでトップランナーたちの取り組みを説明している第２部である。その事例の数は、稲作地帯で２つ、畑作地帯で６つ、酪農地帯で３つ、複合地帯で２つ、食の担い手としての女性のトップランナーたちで４つと計17にもおよぶ。そのため、ここでは各事例についての説明はしないが、それぞれが６次産業化や農商工連携といった取り組みを行い、成果を出しているまさに各地域を代表する先導者たちである。

以下では、本書を読んで感じた２点の特筆すべき魅力を述べようと思う。

第１に事例を実名で紹介している点である。これにより、本書を読んで、興味を持った先進的事例や取り組みに対し実際に触れることが可能となっている。さらに、それを足掛かりに自身の研究に活かすこともできる。

第２に、先駆的取り組みを行っているトップランナーたちの地域社会、農業、食への思いや考え方が詳細に記されている点である。事例研究を行っている農業経済研究者における研究目的は、事例を抽象化しメカニズムや構造といった一般的法則を導き出すことにある。それ自体に、社会的意義や学術的意義があることは言うまでもない。しかし、そこには地域、農業、食が置かれている現状に対し、確固とした思いを胸に農業に従事しながら、迫りくる様々な問題を独創的な工夫で乗り越え、これまでに存在しなかった方法で対応している人々が存在する。農業経済学を研究していると、

農業を取り巻く経済的諸現象を追い求めるあまり、人々の思いや考え方を蔑ろにしがちになるが、本書はそういった忘れてはならない部分を思い起こさせてくれるのである。

現在、北海道に限らず我が国の農業は明るいものとは言い難い状況にある。その様な中、本書で紹介されたトップランナーたちの取り組みは、今後の農業において方向性を示す道しるべになると考えられる。この様な時代に、数多くの先進的事例を取りまとめ、本書を出版した北海道農村文化協会の方々、また同協会の代表として奮闘された故飯澤理一郎先生（北海道大学名誉教授・北海道地域農業研究所所長）の功績は大変大きいものである。

上記の通り本書では数多くの先駆的な事例が紹介されている。農学を学んでいる者、今後学ぶ意志のある者、さらに実際に農業に従事している者にとっては様々な意味で参考になるものである。是非とも一読することをお勧めしたい。